壷國

高安三郎作

H29

M29

詩中之人

內大臣左大將平重盛	重盛の父	妹尾太郎兼康	平家の侍
太政入道淨海	重盛の嫡男	關白藤原基房	重盛の小舅
四位少將維盛	重盛の次男	新大納言成親	成親の子
越前守資盛	重盛の弟	丹波少將成經	院の御藏豫
右大將宗盛	同	西光	法勝寺執行
三位中將知盛	同	俊寛	
頭中將重衡	同	靜憲法印	
大納言時忠	淨海の小舅	式部大輔章綱	
主馬判官盛國	平家の侍	平判官康賴	
肥後守貞能	同	多田藏人行綱	
筑後守家貞	同	竹王	俊寛の臣
飛彈守景家	同	文覺法師	
難波次郎經遠	同	源賴朝	

麻子	重盛の妻成親の妹	祇王	白拍子
師人	成親の妻	祇女	祇王の妹
綾子	成親の娘	佛	白拍子
侍從	綾子の侍女		

平家源家の侍關白の供人町人女房上臈翁草刈童鬼

第一段

其一　法住寺殿　細殿

女房八人出つ

一女　きのふの雨に洗はれて
二女　空は朝より雲もなく
三女　けふの御賀を知り顔に
四女　御庭の花も咲き揃ひ
五女　作りし花と別ちおく
六女　吹く春風にやう〳〵と
七女　散るをそれぞと知る有樣
八女　氣も浮々と致しまする
一女　そりや其筈しや何よりも四位少將維盛樣が青海波を遊ばす由
二女　殿上一の好い男

三女　ほんに小松様の殿達は揃ひも揃ふて好い御きりやう

四女　先つ左大將様のお立派さ

五女　お名の通り松の様な

六女　いやあのお優しい所松の木には見えませぬ

七女　それに引きかへ右大將様あちらが花おらこちらは瓜

八女　あれでもほんの御兄弟か

一女　まぎれぬは少將様御両親の好い所一つにしたおん姿

二女　ほんにこなたにくらべては外のお方は皆深山木

三女　深山木の中の楊梅

四女　濡るとも花の陰に隠れん

五女　そりや誰も同し事したがもう先を越されました

六女　そりやまた誰に

七女　新大納言様の息女綾子どの

八女　綾子殿なら我君様か御心かけたまひ近くにお召しおさるゝはづ

一女　サアそれ故に面白いどうおる事であろうなあ

二女　あれ〳〵樂が始まりまする

三女　どれ早う行て

一同　見ませうわいおあ

入る

其二　同　庭前

三位中將知盛頭中將重衡其外垣代として

少將維盛少將成經舞人として

青海波を舞ふ

出つ

其三　同　休息所

綾姫侍從出つ

侍從　御執心の青海波とう〳〵お目にかけましたなんでもたんと御褒美を戴かねはなりませぬ

綾子　見るばかりに來はせぬわいなあ

侍從　それゝ何のぬかりませう先程申して置きましたおつゝけここへ見えませう

維盛出つ

侍從　それおいで遊はした人の來ぬ間にサアお傍へ

維盛　いや某に御用はあるまい

綾子　エイ

侍從　口說どころじやござりませぬ積る話をサアちやつと

維盛　いや〳〵今に某おどはお顏を拜む事さへもかおはぬようになるであろう

綾子　アレあん事おつしやるわいなあ

侍從　今の事でござりまする誰がお耳へ入れたやら

維盛　此身は凡人及ひもなきはこやの花言葉かけるも恐れあり

侍從　まだおつしやるオゝそうじやわたしが居ては却てむつかし一寸そこまで參ります跡ですねなどだうなりと——　去かし人目の關近くお氣をお

付け遊ばしませ

維盛　たま〳〵の逢瀨じやに濟まぬ顏はどうしてそ

綾子　今のお言葉が氣にかゝつて

維盛　そりやそなたより某こそ口では輕ういふものゝ心の內い波や風ちと推量したがよい

綾子　推量せよとは妾のいふ事たとへ玉の臺でも何の外へまゐりませうそれにまだ御存じなく今の樣におつしやる故妾は悲しうござりまする

維盛　そりや知らぬではなけれとも外ならぬ出世故

綾子　思かなふた其上に何の出世がござりませう

維盛　そりやまた眞實

綾子　ハイ

新大納言成親出つ

成親　維盛殿維盛殿ヤ姫もこゝにか唯獨り何として

綾子　いえあの侍從は今そこまで

侍從出つ

侍從　これは〳〵殿樣には

成親　供に來て何所へ參つた入らさる所に長居は無用早う舘へ歸るがよかろう

侍從　ェィまあ折角

成親　なんと

侍從　いえなにお先へお姫樣には

綾子　そんなら父上

成親　オヽ

綾子　あなた樣にも

維盛　いつれ其内いやなに御免下され

二人入る

成親　さて維盛殿けふの舞は見事〳〵女院よりも數々の御下されものありし由お目出たい事でござる

維盛　おはづかしうござりまする

成親　お目出たいは足下はかりか御親父は左大將宗盛殿は中納言より數輩の長老を飛越えて右大將とは古來稀なりいや御盛ん事じやてのう

成經出つ

成經　父上これにおはせしか唯今何か右大將殿がお尋ねでござりました

成親　右大將とは――宗盛殿か馴れね故今云ふ下から早間違ふと致したわい

維盛　某はお先へ御免成經殿にも御ゆるりと

成經　其内お目にかゝるでござろう

維盛入る

成親　宗盛が何の用

宗盛出つ

宗盛　成親卿にはこれに居られしかィヤ大分貴殿も過されたな五十の御賀の事なれは五十杯を傾けんと引受け〳〵飲む中につい忘れて數知れすィヤ好い心持でござるのう

成親　して御用の趣は

宗盛　某此度昇進の喜に大酒宴を催さんと用意大概整ひました近日改め申入れます必すおいで下されい

成親　それは結構でござるのう

宗盛　新に得たる馬もござる成經殿にも御一所に

成經　有り難う存じまする

成親　して御用は

宗盛　用と申すは即ち此事

成親　あのこれしきの

宗盛　ヱ

成親　いや結構でござるわい

宗盛　是非々々おいで下されい酔ふた酔ふたこりや太刀も重たうなつてまゐつたわい　よろめきながら入る

西光出つ

西光　成親殿

成親　西光殿か

西光　あれでも右大將

二人　ウワハヽヽヽヽヽ

成親　いや彼ばかりではござらぬわい一族の叙位幾十人

西光　安藝守より僅のひまに入道は太政大臣隨身兵仗を賜つて牛車輦車の宣旨を蒙り乘りあから出入なす

成親　西八條の榮華の樣此殿よりも過きたるべし

西光　胸惡きい俗物共烏帽子衣紋に至るまて六波羅樣とて學ぶとか

成親　はては凡人にためしなき中宮までまゐらせたり

西光　それはさて置き我君より御内意ありし貴殿の息女いかゞなさるゝ御所存なるか

成親　願てもなき御仰せ早速差上け申すでござろう

西光　せめてものおん仕合しかし中宮には早御懐姙の御樣子とか

成親　ェそりやまことでござるかな

西光　いや確かには存し申さぬ

成親　フム

女房出つ

女房　大納言様少將様お召しにござりまする

成經　左樣でござるかそれでは直樣

成親　オヽ參るでござろう

女房入る

成親(西光に)然らは後刻

成經　御意得申さん

西光　一寸おどかしてやつたら心配顏のあのおかしさはかない事を頼みにして運の向くのを待て居るとは新大納言も話せぬわいしかし今い誰もかも皆六波羅にこびへつらひ門前市をなす有樣かれこれ云ふだけまして

西光默禮　二人入る

あろう

女房出つ

女房　西光樣あなたもお召しでござりまする

西光　フム今宵は飲て飲み明そうか

其四　大炊御門

平家の侍禿童大勢雜具を荷ふて出つ

續いて町人二人追かけて出つ

一町　そりやあんまりでござります

二町　どうぞ御りやうけんなされて下さりませ

一侍　何があんまり

二侍　何をりやうけん

一禿　其方共こそ不敵にも

二禿　六波羅の御門前に

三禿　伊豫讃岐左右の大將書きこめて

四禿　慾の方にゝ一の人かなと書て札を立てをつたぞ

一町　何の私が左樣の事

二町　夢にも覺えゝでざりませぬ

一禿　然らゝ何故札の前へ

二禿　立並て笑ひをつた

一町　ェィ

三侍　家財を取上けるは當り前じや

四侍　そればかりではない其方共も

五侍　引くゝつて連れて行く

一町　ェィ此上にまだくゝられますのか

二町　なさけない事じやなあ

六侍　こまこと云はさす引くゝれ

町人逃ける　侍追ふ

一侍　ヤァ邪魔ひろくは何奴じや

竹王　それがしより汝等こそ餘りといへは非道の振舞町人共の家具を奪ひあまつさへ捕へんとは强盗の上の强盜め

二侍　だまれこやつ

一禿　此直垂が目に見えぬか

二禿　此禿が目に見えぬか

三侍　六波羅殿を恐れぬか

竹王　オゝ六波羅の者共とは固より知る六波羅ならて切り禿直垂着たる强盜あらんや

二侍　ェィこやつから引くゝれ

竹王出つ　侍二人を倒す

爭ふ町人逃け去る　竹王遂に捕はれ一同入る

あなたより關白の車供人出つ

こなたより平資盛若侍馬にて出つ

關白の前驅一　下に
同　二　下に
同　三　こりや何者じや乘打するは
資盛等かまはす乘たまゝ過く
同　一　無禮者
同　二　引下せ
資盛等馬より引下さる　爭ふ　資盛の從者多く打たる　關白の一行過き行く
資盛　いやじや〳〵此樣に馬より引づり下した上衣服まで破りをつた
一侍　多勢に無勢是非なくも
二侍　此耻辱は受けましたが
三侍　此返報は急度近日
四侍　殿樣に言上おし
五侍　殿樣より大殿樣に

資盛　そうじや祖父樣に申上け仕返しせねはならぬわい
月出つ
一侍　月なき中にてまだ仕合せ
二侍　見られぬ内に早御歸館
三侍　いさ御乘馬を
資盛　オヽ皆も乘れ乘たまゝも一度こゝを通つて歸ろう
皆乘る　下されたる處を乘て過き行く

其五　重盛館　寢殿
重盛靜坐
月明――暫くして雲月を蔽ふ
重盛　滿つる時は欠くる時霽るゝと思へは雲蔽ふ曇りなき時いくはくそ數ふれは四十年見る此月は幾たひか欠けては滿つる滿ては欠く我々の一族い欠く事なくて年々に充ち滿ちて今十分公卿となるもの十六人殿上人

三十余人諸國の受領六十余人榮華の端にあつかるものいくはくといふ
數を知らすまして我々兄弟にてためし少なき左右の大將妹は后と仰か
れまだ年若き悴等まて四位五位をかたしけなふし父上は太政大臣六十
余州の秋津國三十州は一族の知行の國とは恐ろしや余りに張れは破れ
易し破るゝ時やいかならん高く昇れい落るも深し落る時やいかならん
破るゝまて人は悟らす昇る時は落つるを思いす飽くまて貪ほる慾念に
四海の寶寄せ集め夜も夜ならす晝も夢綺羅の花にも秋來ると知らすあ
たりを憚からす君を侮とり民を苦しめ日に〳〵つのる奢の沙汰拂へと
積る村雲に月も光を蔽はるゝ澄む甲斐もなき身はひとつァ今宵もまた
寢られぬわい

麻子資盛出つ

麻子　我つま氣がゝりな事が出來ました
重盛　おん身にも氣がゝりが
麻子　さいおお聞きなされませ今の事資盛が大炊御門の邊とやらで關白様に逢

いましたらその時に理不盡な此子をいじめ供も皆馬より引つり下した
と歸て來ての物語
重盛　おに關白殿下に出合ふて馬より皆々下されしさてはこなたより下りざ
りしかヤィ資盛子細を申せ
資盛答へすうつむく
重盛　供には誰を連れ居りし其者共をこれへ呼へ
麻子手を打つ　侍女出つ
麻子　供の者をこれへ呼へや
女房　かしこまりました

侍二人出つ　入る

二人　お召しにござりまするか
重盛　其方共か資盛に今日從ひまゐりしは
二人　左樣にござりまする
重盛　今聞けは關白殿下に出逢ひしといふ事じやか詳しく樣子を語り聞せよ

一侍　御免なされて下さりませ
重盛　先つ詫ひては譯が分らぬ樣子はどうしや
二侍　申譯がござりませぬ
重盛　云はねは尙々分らぬわい
一侍　我々共が附添ひなから
二侍　輕からぬ御耻辱
重盛　耻辱とはいかなる耻辱
一侍　御乘馬より無体にも
重盛　引下されしも耻辱を得たと其方共は申すのか
二人　申譯がござりませぬ
重盛　うりや得たのではない與へたのじや
皆　ェイ
重盛　我と我身に與へたのじや
資盛　何とおつしやります

重盛　こりや資盛うちや重盛が子でないか日頃の言葉何と聞く關白殿下に出逢ひなから馬より下りぬなんぞゝいふ不禮の振舞誰に習ふた
麻子　何の事じや可愛相に此子を叱るとはさかさまな
重盛　こりや兩人余の者にも云傳へよ耻辱とは他人より故なく得らるゝものならす我より道を破るこう第一の耻辱なれ此度も我と我に耻辱を與へて誰を恨む——かゝる事より稍もすれは思ひの外の大事となる者——よく〳〵汝等心得て再たひしてはならぬぞよ
二人　恐れ入りましてござりまする
重盛　翌は予か關白殿下の御舘を訪ふて詫言せん
皆　ェそりやまたあんまり
重盛　まだ其方共には分らぬか
皆　默
重盛　立て立てもはや休息せよ彼の事にて疲れつらん
資盛侍入る

重盛　我子までが此有様

麻子　まだお休みなされませぬか

重盛　此頃は夜が寝られぬおん身は先へ休むがよい。

麻子　うんなら我つま御免なされて下さりませ

重盛無言うなづく　麻子入る

笛の音

重盛庭に下り徘徊す

侍従忍て出つ　月明

重盛見とめて誰じや誰じや

侍従　ハイ――私でござりまする

重盛　侍従か――何用あつて此夜深に

侍従　それは――オヽうじや姫君様の御願掛御代参を致しまする

重盛　代参といそりやどこへ

侍従　ヱ

重盛　變つた處へ行くのじやのう

侍従つまる

重盛　行け行け

侍従　ハッ

重盛　いや待て待て去て姫の病氣いどうじや

侍従　なにお姫様の御病氣とい

重盛　されば病であるまいか院の御所よりお召しあるに今に於て參られぬは

侍従　ほんに御病氣御病氣でござりまするいやもうお悪いとばつかりでいつまでも御本復はまあ覺束のうござりまする

重盛　それは困つた事じやのう――去かしこゝに藥がある取り次ていくりやらぬか

侍従　うれいまあ有り難い定めて粹なイヤ酸いお藥でござりませう

重盛　こゝは庭先こちらへおじや

侍従　御免なされて下さりませ

重盛上る　侍従も上る

重盛　苦き藥は本意ならねと飲まさにやならぬ二人の身の上

侍従　エイ

重盛　よつく聞け其方も見聞きせん我一門の日頃の振舞余の人はいふに及はす一院にも内々は目醒ましうれはす由然るに御心かけたまふ姫をまねらせぬのみならす我子と縁を結ひなは御憎しみはいかばかりう表に出たし玉はすとも御心惱ます勿体なさ二人が末も恐ろしゝまして父成親卿何とて承引あるべきか我とても知りおからいかで申し出さるべき由なき縁を繋がんより早う思ひあきらめて姫にも御所へまゐるよう其方より勸めてくれ

侍従　うれしやといふてお二人の

重盛　うりや我とても知らいでなろうか知て聞かれぬ胸の内我身の事を忍ふより子の事忍ふい十倍の苦しさといよも知るまじかならず我を恨ます

に一院兩家二人の身あなたこなたを思ひやりあきらめるやう傳へてく

れ

侍従　お言葉返すに返されぬ御尤なれん仰れ姫様も御辛抱遊さねはなりませぬ——ァひよんな事になりましたなあ

重盛　人の見ぬ間に早ういにや

侍従　左様なればれ殿様

重盛　オヽ姫の事を賴むぞよ

侍従　こりやほんの御病氣におらねいよろしうございまする　入る

維盛出て跡を見送る

重盛　維盛か

維盛　ハッ

重盛　これへ來やれ

維盛　ハッ(近つく)

雲月を蔽ふ

重盛　また月は隱れたのう

維盛　左様にござりまする

重盛　月も少しは曇つた方が晴れたより好いてはないか

維盛　何とれつしやります

重盛　足らぬ處に哀れいある貪ほれはとていかて飽かんや戀も遂けぬが戀の

奥

維盛　ヱ

重盛　先の笛は其方か今宵は殊に哀れであつた

鴈一羽鳴て過く

維盛　あれ〳〵鴈か唯一羽

重盛　つれに後れて飛て行く

維盛　さも戀しげに鳴きまする

重盛　親か子か

維盛　妻か夫か

重盛　どうか逢はして

維盛　ヱ

重盛　やりたいものじやのう

月明

重盛　背燭共憐深夜月踏花同惜少年春　入る

第二段

其一　淨海館　寢殿

淨海祇王祇女其外侍女大勢

大納言時忠難波經遠妹尾兼康其外侍臣大勢

列坐　酒宴

祇王　春を飾りて梅櫻

祇女　桃も李も咲き揃ひ

時忠　上には物云ふ花も咲く

經遠　花と花との其中に

兼康　かく包まれて居るといふも

時忠　相國の皆御蔭

經遠　大納言殿の仰の通り

兼康　れ蔭にて此の如く

一侍　れ盃をいだゞいては

二侍　これより上の

侍一同　事はござらぬ

淨海　小さな事を云ひをるわいこれしきに何の滿足此淨海は足らぬ足らぬ

兼康　何が御不足でござりまする

淨海　何もかも不足じやわい美女も日々同し顔見て居てはいやになるこれより外に美女はないか酒肴にも飽き果てたこれより外に美味はないか此館も氣に入らぬ此京も狹いでないかこれより外に好き處其方共は心付かぬか

經遠　あに此京を狹いとは

淨海　見よ〳〵山に圍まれて鼻を打つようじやわい山を後に前に海四季樣々の眺めある處に住て見たいものじや

時忠　うれでゝ攝津福原の御所へれ移りなされませい

淨海　あれへ行かゝこゝへ不便いつう都も諸共に

兼康　ヱイ

淨海　ゑかし小松が何と思ふか

時忠　いや今の時誰あつて相國に逆らひませうや見渡す限り草も木も靡き從ふ其陰に源氏い晝の螢より光を失ひ藤原の花の族も色さめて見る影もなき其有樣いや此一門でなき者い人非人ではござらぬか

經遠　人非人とは面白い

皆　ワハヽヽヽヽヽヽ

侍臣出つ

侍　申上げます右大將樣越前守樣御入來にござりまする　入る

宗盛資盛出つ

宗盛　父上

資盛　祖父樣

二人　御機嫌如何でござりまする

淨海　オヽ兩人共よく參つた

時忠　これい〳〵宗盛殿此間れ話の御祝宴いまだでござるか

宗盛　されい何かと暇取りまして今以て埒明かず其內れ招き申すでござろう

時忠　其節には御秘藏の熊野とやら申す美女

宗盛　ヱ

時忠　いや名馬を拜見致したいな

宗盛　ハヽヽヽヽいかにもれ目にかけるでござろう

時忠　急度れ見せ下さるな

宗盛　ハヽヽヽヽ

淨海　いつに變らぬ氣樂な奴じやうれに引かへ資盛は何故左樣にしほれ居ろう

資盛　祖父樣悔やしうござりまする

淨海　悔やしいとはうりや何事

資盛　きのふ恥辱を受けました

淨海　恥辱恥辱とは何奴に

資盛　關白殿下にござりまする

淨海　關白にもあれ誰にもあれ此淨海を憚からす淨海の孫に耻辱奇怪あり奇怪なり其時の樣子はどうじや

資盛　きのふ大炊御門の邊にて不圖出合ひましたれゝ左右おく我等を馬より下し供の者を打擲して

淨海　憎つくき奴原重盛に語りしか

資盛　父上に申せしに却て我等が叱られました

宗盛　例の兄貴の道立してけふゝ殿下に詫言すると自身に館へ行かれたげな

淨海　また重盛か入らさる謙遊いや此儘に捨置ては我勢を落すに似たりヤァ

經遠兼康汝等これよりいつくにても殿下の通行待受けて前驅隨身嫌ひなく皆髻を切拂ひ資盛か耻雪け

二人　かしこまりましてござりまする　入る

淨海　よしなき事にて氣色が惡るいうれ女共歌へ歌へ

侍女　ハァ——

筑後守家貞出つ

家貞　申上げます佛と申す白拍子推參致しましてござりまする

宗盛　なに佛

時忠　それこそ加賀より出てたるものにて並ひなき舞の上手世にもてはやさるゝものでござる

家貞　未た御當家へ召されぬは本意なき心地にござりますれは何とそ一たひお目見得をお許しある樣願ひまするとかなたにひかへ居りまする

淨海　いやなめ過きた女じやわい呼ひもせぬに推參するとはかなはぬ事じやいなしてしまへ

家貞　ハゝ

祇王　まあお待ち遊はしませ折角參りましたものすげのういなすも不憫といひ殊に妾か妬にて止めた樣に思はれるもはつかしうござりますれは一寸なりとも御目見得をお許しなされて下さりませ

淨海　フムしかしきりやうはどうじやな

家貞　ハ彼も中々優れ居ります

淨海　呼ひもせぬに參るとは大分變つた奴と見える逢つてやろう呼出せ

家貞　すりやれ目通り致させませうか

時忠　御意の變らぬ内早々これへ

家貞　ハァ

時忠　花ある處は呼ばずして蝶鳥の來るとひとしく求めずして美人寄るこれも偏へに御威勢

宗盛　左かしどんな者であるか

家貞佛出つ

家貞　お召しに從ひ白拍子佛召連れましてござりまする

時忠　これい中々尤物じやな

佛　お叱りもなくお目通りお許しなされて下さりましておうれしう存しまする

淨海　フムまつ一つ歌ふて見い

佛　ぶしつけながら仰に從ひ

君をはじめて見る時い
千代も經ぬへし姫小松
御前の池なる龜か岡に
鶴こそむれ居て遊ふなれ

淨海　イヤ中々これはよい聲じや舞も定めてよいであらう一さしそれにて舞て見せい

佛　いつれも御免下さりませ

徳是北辰椿葉影再改
尊猶南面松花色十廻

舞ふ

よしさらは心のまゝにつらかれよ
さなきは人の忘れかたきに

淨海　こいつ予か心をいひをるわい――早くこゝへ參れ參れ

佛　それでは余り恐れ多うござりまする

淨海　ェィぢらしをるな立て手を取る今より我側離さぬそ

佛　これは思ひもよりませぬ唯お目通りはかり願ひましたにそれでは第一祇王樣へ私が濟みませぬ

淨海　何といふても返さぬわい但し祇王に憚るなら祇王をこれより出してしまうそ

祇王　ェィ

淨海　其方こそ出て行け

佛　それでは尙々濟みませぬからお目通り出來ましたも皆祇王樣のお取りなしそれにあなたを出させましておめ〳〵殘て居られませうか

淨海　それでは祇王そちも舞へ佛の舞とくらへて見ん

祇王泣く

淨海　ェィ涙はきらいじや早く舞へ

祇王　ハァイ

佛もむかしは凡夫なり
我等も遂には佛なり
いつれも佛性具せる身を
へたつる心のうたてさよ

立上る　不意に狂風　襖皆倒る　侍女騷く

淨海　ヤァ何を騷く舞へ歌へ

風益々荒る　物の音

淨海　舞はぬか舞はぬかあせ歌はぬ風鳴らは鼓を打て風騷かは聲張上けよ四海を握る此淨海月も日も我爲に光りかゞやく其中に逆らひ立てする不禮の風風如きに興醒すあ歌ひ騷きて風打消せ

風益々荒る　屋根板散り來る

淨海　ェィ云甲斐なき奴原かな汝等舞へすは資盛舞へ

資盛　ハッ

長生殿には

時忠　ィヤ風吹かす

不老門には秋もなし

立て舞ふ吹倒さる

長押の折飛ひ來る　淨海擲つ

其二　堀川

風の音

經遠兼康其外侍大勢出つ

兼康　もはや通行に間もあるまい汝等の内一人遠見せよ

一侍　ハッ　入る

經遠　車近かは関を作り一度にかゝつて誰彼の用捨せず髻切れ

一同　ハァ

一侍　唯今それへ見えまする　一侍出つ

經遠　忍へ

一同ひそむ

關白の車供人出つ

風の音　関の聲　侍現はる

前驅　ヤァ何者じや此狼藉

經遠　誰でもない六波羅の御内の者

兼康　きのふの恨返さんとてこゝにて待受けをつたるそ

前驅　ヤァまたしても不禮の振舞

經遠　それ者共

かゝる　爭ふ　風の音　關白の從者多く髻を切らる

經遠(隨身一の髻を切り)これは汝の髻ならず主の髻として切るそそれ者共笑へ笑

へ　入る

侍一同　ワハゝゝゝゝゝゝ

關白基房半切られたる簾をかゝけて出つ

一隨身　我君様
二隨身　言語に斷えたる此振舞
一同　口惜しうございまする
基房無言に見つめる
西光出つ
基房西光と顔見合せ車
一隨身　轅も折られ御牛も倒されましてございまする
基房涙を拂ひ徒歩して一行入る
西光見送り不道も最早極つたわい

其三　淨海館　祇王の部屋
祇王祇女出つ

祇女　姉様
祇王　妹

祇女　ひよんな事になりましたなあ
祇王　きのふまでもけさまでも並ぶ者なき御寵愛里の母まで何やかや御贈り物絶えすして知らぬ人にも羨まれ名前まで眞似られしに手の裏返すおん心出て行けとは情けない人に顔が合はされぬ
祇女　わたしとてもお蔭にて兎や角人にもてはやされたにこれから何とあるあ事そ心細うございんすはいおあ
祇王　そなたは元より此身をはたよりになさる母様がさそやお嘆きなさるであろうこりや何としたらよかろうなあ
家貞出つ
家貞　迷惑おお使を仰付られましてござる
祇王　これは〳〵筑後守様してお使の趣は
家貞　されは甚申難いか御上意なれは是非がござらぬ拙者をお恨み下さるな扨殿の仰にい直様これより御退出お里へお歸りなさる様仰付けでございまする

祇女泣く

祇王　まだ日も高うござりますれは人に顔を見られまするも心苦しうござりますれはせめて暮までお情にてお待ちなされて下さりませ

家貞　御尤にはござれとも例の殿の性急にて片時も猶豫するあとの仰は是非がござらぬて早々退出の御用意あるべし拙者は仰せ傳へるまでまたお目にかゝるでござろう　入る

祇女　あんまりじやあんまりじや姉様あんまりではござんせぬか

祇王　いや〳〵日頃の御氣質では御寵愛もきつい代りお嫌ひとなつたらはお側へも行かれぬわいなあくどう願はゝ尚々御機嫌損ねるはかりそれよりは跡見苦しうおい様に部屋片付けて下りませう

祇女　そんならお下りなされまするか

祇王　外に仕様がおいわいなあ

宗盛出つ　入る

宗盛　オヽ祇女一人か丁度よい此間の返事はどうじや

祇女　これは〳〵若殿様あなたにお願いかござんすわいおあ

宗盛　そちの事なら何でも聞こう

祇女　外の事ではござんせぬ姉様のけふの不首尾どうぞあなたから大殿様へ堪忍為て下さるやう願ふて見て下さんせいなあ

宗盛　其事あらそりやいかぬあのむつかしい父上に逆ふて怒られよゝりだまつて居るが遙かまし殊に此度の佛とやらは余程お氣に入つた様子外の者はあかぬ〳〵

祇女　左様でもござんせうがそこをも一度あおたから

宗盛　困つた事をいふ奴じやなあ

祇王出つ

祇王　いや〳〵妹もう云やんおどなたにお願ひ申しても何の甲斐があるものそわたしやあきらめましたわいなあ

宗盛　そんならこれからお行きやるか

祇王　仰に從ひ下りまする

宗盛　さかし祇女は殘て居や

祇女　いえ〳〵わたしも下りまする姉樣にお別れ申し何の獨り殘りませう

宗盛　そなたは予か館へおじや

祇女　いえ〳〵一所に下ります

宗盛　こいつ困つた奴じやなあ

侍女出つ

侍女　大殿樣のお召しでござりまする

宗盛　そんなら祇王祇女も最一度思案して返事しや

祇女　もうお返事いござんせぬ

宗盛　まだ片意地な事いひをるわい

祇王　いやなに妹折角殿樣の仰せじやないかうあたは何でお受けしやらぬ

祇女　お前に別れてまた忽ちお前の樣な憂き目に逢ふいわたしやいやでござんすわいなあ

侍女と入る

祇王　これはよう氣が付きまさたはかないものは女子の身盛りといふても春

の花玉の臺に活けられても移るに間もない顏形移らぬ先に早飽かれ增す花の目の前にて耻かゝされて捨てられてまだ此上にどの樣な憂き目に逢ふも計られぬわたしや心をきめましたこれより遠い山里へ尼とも

祇女　あつて身を隱し日陰に蟄むつもりじやわいなあ

祇王　うんならわたしも御一所に

祇女　いえ〳〵そなたはまだ若い

祇王　御前とて二十一

祇女　そなたは十九か

祇王　姉樣

祇王　妹ァ短かい榮えであつたなあ

佛出つ

祇王祇女見て立上る

佛　まあ〳〵待て下さんせいなあ

祇王　わたしに用はござんすまいわたしもお前に用いない

佛　いえ〳〵一寸下に居て

祇王　萌え出つるも枯るゝも同し野邊の草

佛　ェイ

いつれか秋に逢はではつへき――妹おじや

姉妹入る

佛　お腹の立つゝ御尤もわたしとて御寵愛取ろうとて參りはせぬ有り樣は

羨ましくせめてお目見得なと願はうと思て來たら思ひの外かふいふ事

になつた故余りの事に落付かぬ――第一氣の毒でならぬわいおあ今開

けは尼になり山里へおいでとやらうんな氣にもなるであろきのふまで

は春の夢忽ち醒めてけふの秋

風の音

ア物を思へは風も染むほんに同し野邊の草祇王樣ゝ枯れて行く此身は

これから萌え出る盛りいつまで續くやら「いつれか秋に逢いてはつへ

き」此身にも秋風が――ア心細うなつて來たなあ

侍女　殿樣が召しまする　侍女出つ

佛　何やら心か進まぬわいなあ

侍女　早うおいでなされませぬと御機嫌が損しますそえ　入る

佛　少しの事で浮き沈み丸木ふまへて海渡る手かけ目かけの身の苦しさ

侍女出つ

侍女　何をしておいでなされますもう御立腹でござります

佛　てもむつかしいお殿樣

淨海出つ

淨海　祇王よりは情ごわくまゝにおらぬも長うはいやじや

佛　妾は何やら心持が

淨海　ェイぐづ〳〵云はすと來いといふに

無理に引張て入る

其四　同寝殿

侍人四人出つ

一侍　何とえらい風ではないが

二侍　塀垣はいふに及はす家の倒れたも何百軒

三侍　鳥獣より人までも死だのは數知れす

四侍　どうぞ早く止めはよいが

一侍　風もこわいが風よりも御前様が拙者はこわい

二侍　風はたつた一日じやが御前様は毎日毎晩

三侍　吹通しでたまらぬ〳〵

皆　ワハヽヽヽヽヽ

五侍出つ

五侍　唯今小松内大臣様御入來でございまするそ

一侍　然らは拙者は此由を大奥へお取次　入る

二侍　拙者等はお出迎ひ

三侍　致すでござろう

重盛出つ

二侍　唯今これへ御前様

三侍　お出ましに

四侍　ござりまする

淨海資盛時忠侍臣出つ

重盛　今日は思ひがけなき大風にござりまする父上には御機嫌いかゞお伺ひ申し上げまする

淨海　凶事にはいつとても早速に見舞てくれるうれしいそよ

重盛　參上致す道すから家屋の破損人馬の死傷計り知られぬ其中に此お舘は何事の障りもおきは先つ大慶にござりまする資盛うちやこれへ參り居つたか

資盛うつむく

灘波經遠妹尾兼康出つ

二人　立歸りましてござりまする
淨海　ぞうじや首尾よくやり遂けたか
二人　ハッ(重盛を見てためらふ)
重盛　いつれへそち等は參りしな
二人　ハッ(ためらふ)
重盛　云ひ得ぬはいふかしゝ資盛其方存し居るか
資盛　ハッ(ためらふ)
淨海　いやなに重盛こりやこうじやきのふ資盛に耻辱を與へし關白殿に酬ひんと其爲めにやつたのじや
重盛　こはけしからぬ御振舞ぢて〳〵いかなる事せしそ
二人　仰の通り計らひました
淨海　うりや皆髪切り取つたか
二人　御意にござりまする
重盛　淺ましき者共かなこりや兩人たとへ父上いかようなる仰せ付けこれわ

るとも何故我に知らせさりしそ第一資盛こそ不屆なれきのふの戒早背きかようの事を仕出ぢて父上の御名を立つ今より其方勘當じや
資盛　ェイ
淨海　これ〳〵重盛日頃に似ぬ短氣の所置勘當とはふびんでないか
重盛　いや〳〵これゝ小事でござらぬ殿下へ對し君へ對し決して此儘免されませぬ早々伊勢へ下るへし經遠兼康其方共も目通りかなわぬ　入る
二人　恐れ入りましてござりまする
重盛　資盛も早く行かぬか
資盛　左樣ござれゝ父上樣祖父樣にも御機嫌よう
淨海　オヽすぐに詫ひて呼ひもどすぞ
資盛　よろしうお願ひ申しまする　入る
侍女出つ
侍女　申上げます祇王樣此歌をお殘し遊いし唯今お下りなされました
淨海　ェイ左樣な事跡で云はぬか

重盛　歌とはどうじやこれへ見せい

侍女　ハッ歌を渡す）

二女出つ

二女　申上げます佛樣祇王樣のお跡を追ひ忍てお出ましなされました

淨海　なに佛が

時忠　してうれはいつくを指して

二女　うれはまだ分りませぬ

淨海　ェィなせ止めぬ不屆者めいやなに何じや家貞によく計らへと早く云へ

二女　かしこまりましてござりまする　入る

重盛　「萌え出るも枯るゝも同し野邊の草いつれか秋に逢いてはつへき」

時忠　さては彼等は無常を感じ

重盛　ァ哀れにもけなげな者共――女は悟りのよいものじやなあ

風の音　蛇來る　侍女騷く

侍女　あれ〳〵　御前へ行くわいな

時忠　誰そ早く捕へぬか

淨海　蛇か（逃け入る）

重盛（靜に捕へて恐るゝ者なき父上が僅か二尺の此小蛇に

時忠　相國にゝ何よりお嫌ひ

重盛　蛇はどこにも居るものじやが

侍臣侍女と入る

時忠　我等は御機嫌伺ひ申さん

重盛　人亂れんとする時は天も亂れて變異あり天人を戒むるか天人運を同うするか保元にゝ慧星現はれ平治には白虹の日を貫きしも皆當れり容易ならざるけふの大風或は事の前徵か――心にかゝる事じやなあ

物音

宗盛侍臣出つ

宗盛　兄上唯今表御門が倒れました

重盛　何御門あの堅固なる表御門が

陰にて多くの聲　うれしや風吹くは天津風ワハ、、、、、、、

宗盛　ヤァ
一侍　いつくともおく
二侍　笑ひ聲
宗盛　もしや天狗の
侍皆　ヤァ
一侍　何にもせよ聲のしたる方を尋ねて參りませう
重盛　いや待て待てありや風じや
侍皆　エイ
重盛　天津風の言葉じやわい

第三段

其一　成親館

侍從其他侍女出つ

一女　あんと皆さんお目出たい事ではござんせぬか
二女　さいなこんな時有り合した私共も仕合せでござんす
侍從　ァこれ〳〵お目出たいお目出たいと余り仰山に云いしやんすな
一女　それでもこんなお目出たい事がたんとあるものかいあ
二女　女子の身には此上もおい立身出世じやござんせぬか
侍從　立身やら出世やら何やらさつぱり分らぬわいあ
一女　何を云はしやんすお殿樣もついにない御機嫌で立つたり居たりしておいで遊いす
二女　御臺樣も御自身に何やかや遊はす故雨が降らねはよいわいなあ
一女　けふ降てなるものか

侍從　いや降て降て降て通したらよい氣味であらうわいな

二女　そうしや降ても大事ないどうせ今宵の御儀式は

侍從　ェィ何の事じやいま〳〵しい降るなと照るなとしたがよい

一女　侍從樣は法界吝氣か

二女　こりやおかしい

二人　アハヽヽヽヽ

侍從　ェィ氣色の惡るいわつちへ行こ

二人　アハヽヽヽヽ

師人出つ

師人　皆の者は何して居やるまだ用意は出來ぬそやあちらへ行て手傳やいのう

二人　かしこまりました

師人　侍從姫はどこにまだこしらへは出來ぬかえ

侍從　ハイまだてござりまする

入る

師人　何をして居やるやら姫々

綾姫出つ

綾姫　何の御用でござりまする

師人　ほんにまだ何もせすそなたは何としやつたのじやけふの事を忘れてか

綾子　ようよう存じて居りまする

師人　それに何で支度はしやらぬ

綾子答へす

師人　此間から籠てはかり花か咲ても見にも行かす浮かぬ顏は惡るいのかと尋ねてもちがふといふそれにやつぱり其有樣ほんにどうしやつたのじや

侍從　それが御病氣でござりまする此間小松樣ィヤあのあんのお藥で尙々重うではおい御本復おされました

師人　そんなら早う化粧しや父上もお尋ねじやお叱りおき内よいかや

侍從　かしこまりました私が篤くり御意見なに御身じまいいたしませう

師人　そんならそなたを頼みました

侍從　お姫様――申しお姫様なんぼお考へ遊いしても外に思案はござりませぬぞえ

綾子　そんならどうしたらよいのじやえ

侍從　さあどうしたらとてお湯を召し

綾子　ェ

侍從　お身じまいを遊いして

綾子　そしてどこえ行くのじやえ

侍從　こゝからズット南の方

綾子　小松様も南の方

侍從　も少し南の御所でござんす

綾子　ェィ何の事じや聞て居れは御所々々ともう云やんなそなたまでが同じ様にもうよい〳〵今までい相談したがこれからは何も云やせぬそなたも云ふてたもんなや

入る

侍從　これはきついお腹立そうおつしやれは跡が出ぬしかしまあお聞き遊をしませ殿様はあの通り何でもかでもと思召す頼みにした小松様は事こ分けてのお諭しに取付く處がござりませぬそれにくよ〳〵思召し行くまいと遊はしても追付お迎が見えたならどうしてお通れなされますもうさつぱりとあきらめて御用意をなされませこれ申しお姫様――お姫様

綾子　そなたは覺えがないかしてようそんな事云やるのう

侍從　それはまんざらわたしゃやとて覺えのない事もござんせぬがかう詰つていやどうも仕様が

綾子　もうよいもう何もいふてたもんなもうそなたを頼みはせぬ

侍從　そうして何となされます

綾子泣く

侍從　こりや困つた事じやなあ――ェィもう仕様がないそんならかう遊はしませ一寸一筆お書き遊はし私か一走り小松様へ持て參り若殿様にこつそりと御手渡し致しまして暮を相圖にお舘を

綾子　ヱ

侍従さゝやく

綾子　よういふてたもつたそんならこれから直に行て

侍従　さあ一筆遊はしませ(紙筆を渡す

綾子　手がふるふてどうも書かれぬそなた代りにいふてたも

侍従　氣の弱いれ方じやなあよろしうござりますそんあらわたしがよい樣に申しませう悟られぬ樣れ氣をれつけ遊ばしませ　入る

成親師人出つ

成親　姫なんじやまだ支度もせずこりや一体どうしたのじや

師人　先程も申しましたに

成親　申しましたに所じやない女共女共

侍女出つ

侍女　何御用でござりまする

成親　それ早う姫の支度

綾子　いえあの侍従が歸りまして

成親　侍従はいつれへ參つたな

綾子　ヱイ

成親　侍従の爲に待たれようかそれ早うあにをぐづ〳〵

姫侍女と入る

師人　せくほど何も出來ませぬ

成親　心にかゝるゆうべの夢鴨の社と覺しきに參詣なしてぬかつく所神殿の扉の中より誰れとも知れず聲高に「櫻花鴨の川風恨むなよ散るをはえこそ止めさりけれ」今に覺ゆる歌の言葉此程右大將を所望して八幡に大般若を讀ませし時山鳩來りて食ひ合ふ果して宗盛に取られたり彼といひ此といひ心よからぬ事じやなあ

成經出づ

成親　成經か院の樣子は如何じやな

成經　あなたは用意整ひました暮ると直に迎のお使者おつかはしになりますれは其おつもりにて御用意を

成親　こなたは今に整はぬ女子共のぐづ〳〵と何をするやら埒明かぬ去かし

兼ての望かなひ喜はしい事ではあいか

成經　お目出たう存じまする

成親　暮るといふても間もあるまい姫はまだか女共寢殿の掃除はどうじやこ

りや自身に見廻らねはならぬわい

成經　拙者か見分して參りませう　入る

師人出つ

成親　まだぐづ〳〵御身も衣裳を着替ぬか

師人　あなたもまだでござりまする

成親　ウム人の事にかまやるな

成經出つ

成經　もうお迎が見えました

成親　もう見えたかそれお出迎ェィ衣裳じやそれ早う致さぬかい

三人入る

綾子　侍從は何をして居やるもうお迎が見えたといふにェィ遲いどうしたの

じや胸さわぎがして來たわいああ

侍女出つ

侍女　姫君樣御臺樣が召しまする

綾子　ェィもうとつと辛氣な事

侍女　さわお越し遊はしませ

綾子　今直に行くわいなわ

師人出つ

師人　さわ〳〵お使者は見えたぞえそなたもあれへ一寸出や

綾子　お跡から參りまする

師人　遲うおつては失禮じや妾と一所にさわおじやいのう

無理に手を引て侍女と入る

侍從出つ

侍從　もうお迎ひが見えた樣子お姫樣――お姫樣――どれへおいで遊ばした
――もうお出まし遊はしたか――お姫樣

綾子出つ

侍從(実當り)お姫樣かさあ早う

侍女出つ

侍女　姫君樣こりやどこへ
侍從　どこへでもよいわいおあ
侍女　何を云はんすお召しじやわいなあ　姫の手を引て入る
侍從　あつちも外にお待ちじやわいなあ
侍女　何の事じや外にお待ち――どうやら怪しい今の樣子――そうじや此由御臺樣へ　入る

師人侍女出つ

師人　それ〳〵部屋をさがして見や
侍女　どこにもお見えなされませぬ

師人　こりや困つた事じやなあ

成親出つ

成親(探し廻り)たはけめたはけめそれ故に申し付けた何故番をしをらなんだそれ庭の隅塀の外皆寄てさがせさがせ　入る
侍女　ハア
成親　いやあのお使者に知れぬ樣ひそかに致せと申付けい誰も居ぬかそれ師人早う行て申付けぬか

師人入る

成經出つ

成經　父上意外な事が起りましたお
成親　お使者には知れまいな
成經　それいまだ知れませぬが時刻おればと促かされます
成親　エイ困つた奴どこへ參つた
成經　もしや外に契約の

成親　左様な事があるものか

成經（散らある短冊を取上げ）「雲井より吹來る風のはけしくて」

成親　エイ此中に歌どころか

成經　いえ〳〵いはれありげの歌

成親　なんじや「涙の露の置きまさるかな」

成經　こりやたしかに妹の筆さては此事望まさりしか

成親　エイ憎むへき女子じやなあ（短冊を裂く）

師人出つ

師人　所々方々たづねましたがどこにも姿は見えませぬ

成親　それ見たか兼てよりよく〳〵申含めよと云付けて置たるにかような事を仕出すは全く御身が悪るいからじや

師人　なんぞといふと妾はかり悪るい様におつしやれと姫に思のある事はあなたもよう御存じゝや

成經　こりやまた誰を

師人　小松様の嫡子維盛殿

成經　エ

師人　外に待つといふたとあれは一所に逃けたのであろうわいなあ

成親　娘まて盗み取り人の榮をさまたくる非義非道の平家の振舞恨に恨は重つたよしこれより院の御所へ參り一々君に訴へくれん

其二　維盛綾姫道行

ものゝふも弓矢を捨てゝ二十年いくさよはひに引きかへて悲嘆やようでう笙和琴駒にむちうち行く先も地主の櫻や嵐山もみぢかざして日を送る大宮人となりしより顔も形も鵜川の水に洗はれ照り光る源氏の君の幾たりとあるか中にも取り分けてゆうにやさしき姿こそ今は憂き身の我つまや我戀人と手を取りて目當なけれと心せき月をも待たずたどり行く

朱雀の大路宵なれは行きかふ車音絶えで二條三條人繁し知らぬ者にも憚かれは綾の小路に行のはやと夜目に見えねと折れ行けは人も折よくみゑ通照らす火影

もかすかなる心大宮横きれは足もやう〳〵地に付きて手さへ去つかと取り直し
夜風覺ゆる堀川も添ふてあゆめはうきか中ならぬむかしにまさりしと西か東の
洞院も顧りみもせす一筋に京のはつれの京極を過きてやう〳〵町の外はつと息
つき佇めり

雜盛　やう〳〵町を出てたれとこれよりどこへ行たものゝ

綾子　心細うござりまするなあ

闇を穿ちて唯一つ村か火影は人や住む人を通れて來たれとも人に離れぬ習とて
人のなけれはうらさひし人ある方に急かんと三足五足寄り行けは風もおけれと
消ゆる火の跡は戀より尙暗き闇に光の戀人の顏も見えぬかいつくぞやこゝにこ
ゝにとすがりつき歩みもやらぬ甲斐なさよ
野邊の千草に影法師うれしや月と見かへれは東の山のいたゞきをいつか離れて
はる〳〵と大路小路を打越して野にも森にも照り渡り尙行先に關となる藪も隱
さぬ西山は今宵の月の宿りうやわれも宿らんあおたへと身をつくろうて先立て
は

綾子　まあ待て下さりませ

雜盛　うなたはどうぞ去やつたか

綾子　馴れぬ事とて殊の外足が痛てなりませぬ

雜盛　こりや困つた事じやおあ

綾子　ほんに昔はかりうめの花見遊山も輿車多くの者にかしつかれ庭へも獨
りは下りなんだに思もよらぬ眞夜中に供をもつれす此野路

雜盛　さぞ悔やしうござろうなあ

綾子　あれまたあんお惡い事

うもやふたりが戀中はきのふけふかやこぞの春あの殿上の淵酔にまみえうめた
る朧夜は十五と七のおぼこ氣にはかどりかねてあかつきの鐘を其場のなかだち
と後の恨を喜ひし夢のはじめのうれしさは

綾子　思ひ出してはかり居るわいな

雜盛　うりや我とても同し事

逢瀨少き吉野川渡らぬ中に雲井より吹き來る風に奪はれてあれあの月の中に咲

く桂の花と見る事かと氣つかへは增すおもひ

維盛　よく〳〵深きえにしぞや

いづくまでもいつまでもかくこゝろあれとすがり寄り見かはせは雲隱れ月に代り

てはら〳〵と降る雨にオゝうれよ

維盛　嵯峨の奥に知る人あり一先つかしこへ落行かん

いざこゝかたへと草を分けもすゝ濡らして走り行く

鐘の音

あなたより佛尼の姿にて出つ

こなたより文覺法師姿にて出つ

闇爭

雨折々

月出つ

佛　今のはどうやら

維盛綾姫入る

文覺　南無阿彌陀

第四段

其一　鹿か谷　俊寛の山莊

基房靜憲法印成親成經
西光式部大輔章綱平判官康頼俊寛　列坐

基房　積り積りし五月雨の
成親　雲に隱れて月もなく
成經　わつか晴間の靜かさは
章綱　谷に落入る瀧はかり
俊寛　人里遠き此山庄
康頼　密談には最屈竟
靜憲　我君にも御幸の仰されと万一途中にて人目に觸れなは御大事とお止め
　　申せし其代り某に評議の模樣見て參れとの御諚でござる
西光　いかに方々我君の御意といひ日に〳〵積る鬱憤にいつまて時を待つへ

きう一日延せは一日とつのる平家の惡行は關白殿下に不禮の振舞こゝ
に至て極れり某折しも通りかゝり目のあたり見るくやしさ最早猶豫な
り難し今宵は確かに事を舉くる計を定め申さん
成親　げに西光の云はるゝ如く傍若無人の平家の振舞官位俸祿我物顔
靜憲　君臣の禮を思はす朝威を侮とる傲慢不禮
基房　關白とは唯名はかりよろつ平家の心のまゝ
俊寛　小面憎きは禿童平家の事少しにても惡しざまにいふものあれはからめ
　　取るのみならず手に任せて家財を奪ふ見るに見兼て我家臣竹王が救は
　　んと中に入りしに捕へられ我にも告けす殺せし由
西光　うゝ立札より起りし事か某余り胸惡るさにわざと門前に立てたりしか
　　罪もなき町人共貴殿の御家來まて失いせしゝ意外でござる
章綱　有る事無い事種として
康頼　民を苦しむ非義非道
成經　聞けば大納言時忠ゝ平家の一族にてなき者は人非人なりと申せし由

西光　數え擧けない限りわらし余の事聞くより已が身に皆うれぞれの恨みあらん我等はかりか天か下同し恨を抱く者いくはくあるや計られす殊に源氏の人々い見るも哀れの其有樣家の嫡統賴朝い伊豆の浦回の海士に落ち帶刀先生義賢の忘れ形見駒王は木曾の山家に山がつの中に交わる憂き姿賴政獨り三位とはいへ都の土に埋れ木のようの花見る口惜しささこそと思ひやられたり我等一度事を起さいかなたこなたに山彦の響起るに疑なし

成親　何さま殊に藏人行綱彼い正しく多田の滿仲第七代の後胤なり兼て語らひ置きたるか何とて今に見えさるか

行綱出つ

行綱　唯今うれへ參るでござろう

成親　藏人殿待兼たりかねてお話し申せし如くいよ〳〵事を擧くるに就ては我一方の大將と改めてお賴み申す

行綱　身不肖なれと源家の一人願ふてもおき御賴み急度領承仕る

成親　此事仕をはせたる上は國をも庄をも御所望次第先つ弓袋の料として白布五十反まゐらせたし

行綱　辱けなき御賜物厚く御禮申しまする

章綱　して事起す

康賴　其次第は

西光　恰もよきは山門の大衆共が日頃の騷き前の坐主を取止めしを君殊の外御逆鱗此由知らぬものなければいよ〳〵山攻めとふれまいし不意にかはつて西八條へ攻め寄せていい如何でござる

俊寛　こは面白き計拙者同意仕る

成親　去かし藏人殿の御意見い

行綱　何さまそれもようござろう去かし味方の軍兵はすべて何程ございまするな

成親　それは兼て催ほし置き物の具も用意して諸事整ひ居りまする

行綱　去かし人數は略何程

成親　それは今分り申さぬ
行綱　容易あらぬ大敵なれは大方の事にては
西光　いや軍い數によるものかは彼いか程多勢なりとも鎮西八郎惡源太にか
けちらされしへろ〳〵武者何の恐るゝ事あらん闇をたよりに攻めよせ
て火を放たは狼狽あし亂れ崩るに疑なし
成親　藏人殿いかゞでござる
行綱　いかにもそれはようござろう併し彼方は以前より幾倍となく增しまし
たそ
西光　增せいとて用ひねは何の役に立ちませうや
行綱　併し大事に大事を取て拙者は一先所領へ歸り一家の者共語らひますれ
は暫くお待ち下さるべし
西光　いやべん〳〵と待たれようや左程氣つかいめさるなら御邊はあとにつ
いてござれ
成親　いや藏人殿には先陣を賴まふと思ふたに

西光　先陣は猛虎の如く炎の中へも飛て入る勇士ならではかなはぬて
行綱　すりや某を臆怯といはるか
西光　勇士は後を見ぬものじや
行綱　何と
成親　これは〳〵どうしたもの評議はきめずに無用の爭
基房　まつ靜まつて余人の意見も
靜憲　聞て見るがようござる
基房　各々所存はいかゞじやな
俊寛　某は西光殿の御意見に同意致す所詮人數は及はねは短兵急に攻め寄せ
て意表に出るが第一なり
章綱　拙者も同意
康賴　致すでござる
成親　藏人殿は
行綱　各々か左程まて仰せあれは是非がござらぬ

成親　異存なくは取極め申さん君にも此由靜憲法印何とそ言上下されい

靜憲　いかにも承知仕つた

基房　これにて首尾よう仕をはせおは

成親　日頃の望も相かなひ

俊寛　無念も晴れて

靜憲　君にも御安堵

西光　さぞこゝろよくでざろうのう

月出つ　宿鳥騷く

成親　ヤヱあの音は(立つ拍子に瓶子を倒す)

行綱　少しの事に立騒く――おにありや鳥でざる

成親　人かと思ふて驚きました

西光　鳥獸の其外に洩れ聞くものがでざろうや

成經　あれ狩衣にかゝつて瓶子が倒れました

西光　なに瓶子が――瓶子――平氏倒れ候そや

俊寛　さていかゞ仕らん

成親　唯首を御取り候へ

西光　かしこまつて候(烏帽子懸にて瓶子の頸を貫き椽側を持て廻て柱にかく)

一同(行綱の外)ワハ、、、、、、、、

其二　淨海館　中門

侍宿直

一侍　もう何時でざろうな

二侍　丑の刻でもでざろうか

三侍　東三條の森の方より黑雲來つて御殿の上

四侍　ヱ

三侍　そろ〳〵御腦の時刻でざる

四侍　こりや何をいはるゝそ

三侍　いや戯れではでざらぬそ我々かくとのゐ致すもかゝる變化を射留めん

ため

四侍　いつにおい大力味頼母しい源三位じやわい

一侍　其眞實の源三位も鵺射し力はどこへやら

二侍　一聲のみのほとゝきす空より落ちて影もなし

四侍　まして口はかりの源三位

三侍　いや不禮な事をいはるゝな拙者も鵺を射とうござる

一侍　そりやまたなぜに

三侍　ても外ならぬ御褒美ゆえ

二侍　そんな事であろうと思ふた貴殿の事あら鵺よりも鳩を射たがようござる

四侍　其褒美に蕪の前

一侍　こりやよい釣合で

二侍　ござるわい

皆　ワハ、、、、、、

五侍　唯今多田の藏人殿我君に密々に申上度事ありとて御見參を願はれます

る

一侍　此眞夜中に何事やらん兎に角お取次き致すでござろう（入る）

行綱出つ

二侍　暫くお控へなされませい

行綱　承知致した

主馬判官盛國出つ

盛國　これは〳〵藏人殿深夜の御入來何事でござる

行綱　いや〳〵全く人傳にては申し難き義でござれゝ是非共殿に御面會致したう存じまする

盛國　殿には唯今お休み半

行綱　それは元より存じて居れと翌を待たれぬお家の大事

盛國　なにお家の大事とゝ

行綱　それ故何とそ今一度お取次下さるべし

盛國　然らゝ左樣申上けん

淨海盛國侍臣出つ

淨海　家の大事とは何事おるや

行綱　未たお聞きおされませぬか院中の人々が此程より物の具整へ軍兵を催さるゝ事

淨海　そゝ山攻めの爲でゝないか

行綱　當家を攻めん爲めでござる

淨海　なんと

行綱　既に前刻俊寛僧都が鹿か谷の山庄にて一味の人々會合なし

淨海　一味とは誰々じや

行綱　關白殿下新大納言父子西光俊寛章綱康賴其外北面の侍共おまた與力致してござる

淨海　シテ御邊はいかにして其事を知つたるぞ

行綱　某にも一方の大將となるへしと成親卿のお賴みなりしが今御盛の御當家に何條刃を向けませうや即ち密にお知らせ申す

淨海　院にも此事御承知か

行綱　勿論の事でござる既に成親卿が軍兵を催されし其折も院宣おりとて召されたり前刻も靜憲法印御代理として列席あり西光法師が人も無げに山攻と披露なし不意に代つて御當家を短兵急に攻め寄せんと評議一決致してござる

淨海　ヤァ盛國一門の侍兵早く呼へ呼へ

盛國　ハァ——

淨海　家貞はあるか家貞家貞

入る

家貞出つ

淨海　汝院の御所へ參り大膳大夫を呼出して關白殿下新大納言其外近習の人々に我一門を亡ぼして天下亂らんとする企あり一々搦め取り申すへし君にも知召しめさるゝかと急度言上して參れ

家貞　かしこまつてござりまする

淨海　景家はあるか景家はあるか　景家出つ　入る

淨海　當家傾けんとする謀反の輩京中に充ち滿ちたるを一々に搦め取れ

景家　して其者共の姓名い　行綱こそ〳〵入る

淨海　ヤァいつの間にやら行綱め暇も乞はすいにをつたよい〳〵まつ新大納言に雜色をつかはして申し合はすへき事あれは急度立寄り玉へといへハヽ

景家　一方には西光俊寛章綱康賴一人も殘さす召取りまゐれ　入る

淨海　かしこまつてござりまする

景家　經遠兼康其外侍大勢出つ

經遠　けしからぬ義に

皆　ござりまする

淨海　憎むへき奴原ならすや當家傾けうおんどゝは言語道斷の玄れものめ一門はまだ寄らぬか謀反の輩召取り來らは我面前に引出せ一々面を踏てくれむ

其三　西光館　門前

西光　西光馬にて出つ

いつくより顯われしか一味の人々捕へんとて手くはりなせしと下來の知らせ我身の上に迫つたり猶豫ならす院の御所へ急いてこれよりはせまゐらん

景家　景家侍大勢出つ

景家　ヤァ〳〵いつくへ西八條殿よりお召しでござる

西光　いやこれは奏すへき事あつて院の御所へ參るもの歸て後に西八條

景家　それ　馬より引下す　爭ふ　遂に捕はる

其四　淨海館　中門の廊

侍大勢並居る

成親　急の使は山攻を宥めくれとの頼みならんおん憤り深ければ如何にしてかなふへきヤこはおびたゞしい軍兵共

成親　これは

侍見て取卷く

一侍　我君の仰でござる（引張て入る）

從者逃け去る

西光を縛して景家侍出つ

景家　西光法師召取りまゐつてござりまする

淨海盛國經遠兼康其他侍出つ

淨海　おに西光（憎）つくき法師め面をける蚊とんぼ如き身を以て當家傾けふなんどゝは――有りのまゝに白狀せい

西光　目もあり耳もあるからは御邊等の振舞を見もすれは院中の企を聞きもする口出しせぬとも申すまじいかにも聞た口も出した

淨海　ヱィ落付顏の胸惡さおのれ等如き下郎のはて召使はるゝだに有り難きに寵に誇て讒奏なし謀叛の企言語道斷

西光　人を下臈と云はるゝが御邊も元より上臈か

淨海　なんと

西光　御邊の父は刑部卿殿上の交すら嫌われし忠盛殿御邊は嫡子といひなから十四五までゝ出仕もせす中御門家に立入て蕊の直垂繩緒の足駄京童か指さしてあの高平太と笑ひしかは扇にて顏隱し骨のすきより鼻出して間道を行かれしをまた鼻平太とあざわらへりそれよりいつの事なりしか海賊少し召取り玉ひ四位兵衛佐になられしを人ゝ過分と云合ひしか思ひきや唯今は昇り昇つて上もなき太政大臣となり玉ふ雲に生れし顏しても我目にゝ高平太鼻平太か衣裝つけ冠着ても猿は猿

淨海　しやつ口裂け

西光　裂かい裂け斬らは斬れ頭は飛て地に落つるも此魂は汝等の惡行罪過數
え立て天神地祇に訴へるそ

淨海　ェイ〳〵〳〵どうしてくりやう打て打て打て

侍打つ

西光　汝等如きに爭いぬ身よりも早く首を打て

淨海　いや〳〵こやつ左右なく斬るな嚴しく拷問なして後川原へ引出し素頭
刎ねよ

景家　ハッ歩め

西光を引立てゝ入る

淨海　成親を引出せ

經遠　ハッ

成親經遠出つ

入る

淨海（暫く睨む）御邊はそれても人じやな

成親　ェ

淨海　そも〳〵御邊は平治の時既に誅すへきはつなりしか身に代へて内府か
諫め否み難くて免せしなり其恩義を打忘れ何恨あつて我家を傾けんと
いせらるゝそ人の人たるい恩知る故恩知らぬい畜生じや

成親　全く麿は存じ申さす何者の讒言にや

淨海　いふな成親行綱の訴人西光の白狀にて事は殘らす知れ居るそ

成親　ェイ

淨海　經遠兼康きやつも打て打て

二人　ハッ——併し小松殿の思召も——

淨海　ヤァ内府を恐れて我命を其方共い用ひぬか

二人　左樣ではござりませぬ

成親に近きさゝやく　打つまねする　成親わざと叫ふ

淨海　よし〳〵あなたの一間に押込め置け

二人　ハッ（成親を引立てゝ入る）

淨海　いかに盛國承はれ我一門はいにしへより源氏と共に武を司とり君に敵
たふ奴原を討平らけて幾歳か殊に此淨海は第一に保元の時一族半新院

の御方に參りしのみおらす一の宮御事は亡父の養君にてましませはかたゝ〳〵與力おすへきを故院の御遺誡を重して君の御方に參りたり次に平治に信頼義朝大内に立籠り暗闇の世となせし時我一手にて平らけたり近くい經宗維方が君の御意に背きしも御爲に召取て殊に日頃のお望みおる今上の御即位我助力にてかおふたり一方ならぬ御奉公恩賞は七代まて及ても過きざるに去れものゝもが申す事お用ひあつて故もなく亡ほさんとい余りならすや此上は鳥羽の御所か遙かに遠き鎮西へ移しまゐらす所存なり定めて北面の者共が矢一つ二つ射るであろ用意せよと侍共に其方より申付けい院の奉公思切つた馬に鞍置けきせおか取出せ一族これへ呼ひ出せ

盛國　ハァ——

宗盛　宗盛知盛重衡貞能經遠兼康其外一門の待甲冑にて出つ

知盛　御諚に從ひ何者なりとも何時なりとも攻めよする

重衡　用意整ひ

一同　ましてござる

淨海　オヽ東の方に馬向けよ

一同　ハァ——　行きかける

重盛出つ　皆逡巡

宗盛　(遮り)いやおに兄上これほどの御大事に軍兵一人も召しつれ玉はす甲冑も着用なきは

重盛　大事とは何が大事大事とい天下の事若し朝敵のあるならはその時こそ甲冑着けん今い些細の私事汝等誰に向て其いでたち

宗盛　ハッ

重盛淨海の前に坐す　一同默

淨海　いやなに重盛西光成親等か謀反はほんの枝葉君の御意こそ亂れの根元今の内に斷ち切て鳥羽へ移しまゐらす所存じやが御身い何と思やるそ

重盛泣く　一同默

ア御運も末におりましたなあ――熟ら御有様を見まするに昔を忘れ道を思いす恐れなから我慢の極りよつく御聞き下さりませかたしけなく
も我家は桓武天皇の後胤なから中頃までは官途も低く平將軍の大功す
ら僅に受領に過き申さず刑部卿殿得長壽院造進の御勸賞に内の昇殿を
許されしも人は目ざましく思ひしとか然るに今父上は太政大臣にまて
昇り玉ひ此重盛の愚昧の身すら大臣大將を辱ふし其外一家一門の官位
俸祿いくはくそや同し武門の源氏を見れは保元に六條判官平治に左馬
頭討たれてより今は偏土に散て影なしこれ何故と思召す彼等か武勇劣
るに非す我等の智略優るに非す皆運命のかげひなた與力なしたる大君
の余光によりて我々はかく耀くとは思召さぬか翌さへ知れぬ雲の行衛
謹みても尚謹むへきに傍若無人の日頃の振舞今又君を移さんとは我よ
り否運を呼ひ玉ふか類稀なる君恩を打忘れ玉ひしか謀反既に現はれて
一味の者共召取る上は至當の罪科行ふて事の由を陳し玉ひいよ〳〵君
を敬ひてます〳〵民を憐いれまは神明佛陀も光を垂れ運命長く曇るま
じそれとも御心ひるかへさず飽くまて院を攻めんとならは重盛大臣大
將なり朝敵拂ふ職分あれはこれより御所へ參るべし思ひ當るい保元に
義朝は父に弓ひき遂にい父の首討たり勅命とは申しなから大逆無道の
至りそと空恐ろしく思ひしに淺ましや今日は我身の上に迫りしか――
ア君を守れは孝おらす父に從へは忠ならす重盛進退谷まりました――
所詮院へも參るべからずまた御供をも致すへからす唯重盛か此首を侍
一人に仰付けられ先つ打て捨てらるべしこれより外に道はござらぬ

皆泣く

知盛　頼み切たる兄上が斯くまて仰せあるからは
貞能　何とそ一たひ御思案を御改め下さるやう
皆　我々一同お願ひ申上げまする
浄海　惡黨共か申す事稍もすれはお用ひあれは如何なる事にならんも知れす
重盛　と思ふ故に此企をかし内府か左程まて止むれは是非もなし
すりやお止まり下さりますか

浄海　オヽ

重盛　かくてこそ臣の道それがしの道も立つ次にかの成親卿は正しく君の寵臣なれは手荒き事も致されすかくいへはとて某が由縁ある故にはあらす皆君の爲家の爲朝敵ならぬ私の敵に酷きも後めたし君の思召も候はんまして子孫の末を思へは勉めても情をかけ慈悲を積むこそ肝要なれ保元に左府か屍堀り出したる信西は平治に其身も堀り出されたり報の程の恐ろしさかれを思ひこれを計りかた〳〵お止まり下さりませ

浄海　フム――これも思止めるであろう

重盛　それ貞能成親卿をいたはり申せ

貞能　ハッ

重盛　さらは某は立歸らん返へす〳〵も院參は

浄海　フム

重盛　お止まりなされまするか

浄海答へす

入る

重盛(左右を顧み)皆の者も聞きしならん強て御供せんとならは重盛か此首の刎ねらるゝを見てから行け

一同　ハア――

重盛立上る　浄海と顔見合す　考へなから入る

其五　重盛館

麻子出つ

麻子　夢か虚か此騒動兄上様が御謀反とは夢でなくは虚じや〳〵とは思へとも若しひよつと誠ではあるまいかどうゐる事であろうゐあこんな時維盛か資盛が居たゐらちつとは心強いのに一人は家出一人は勘當――エイもう堪忍してやつたがよいむつかしい御氣質故さつぱり妾は分らぬわいなあ

重盛出つ

麻子　オヽお歸りでござりまするか

麻子　して兄上は
重盛　命乞してまゐつた
麻子　やつぱり虚でござりましたか
重盛　虚とは何が
麻子　兄上の謀叛とは
重盛　虚でない大眞實
麻子　ヱイ
重盛　御身も夢が醒めたかな
麻子　まだ夢の樣でござりまする
重盛　盛國をこれへ呼へ
麻子　ハッ　入る
盛國出つ
盛國　お召しにござりまするか

重盛　其方これよりかけまはり此重盛こそ天下の大事を聞出したれ我を我と思はんものは物の具して急きまゐれと所々に傳へて來るへし
盛國　ハヽかしこまりましてござりまする　入る
重盛　ア惡例も用ひねはならぬわい

其六　淨海館　中門

侍大勢出つ
經遠　小松殿の御諫言にて暫く事は納つたか
兼康　侍共をお歸しなきはまた院參の仰せあらんも計り難いではござらぬか
家貞　拙者も左樣存ずるか其時には何となさるゝ
景家　されは困つた事でござる
盛國出つ
盛國　ヤア〳〵方々よく聞かれよ小松殿の仰でござる
家貞　なに小松殿の

一同　仰とな

盛國　いかにも殿の仰には天下の大事を聞出したれは物の具して早參れとい

つにおいおんいそぎ

家貞　容易には騒き玉はぬ小松殿の御催促

景家　まことに仔細ある事ならん

兼康　こりや急きまゐらすは

一同　なりませぬな

淨海出つ

淨海　ヤア〳〵者共いつれへ行く

皆聞かぬまゐして入る

淨海　こりや〳〵者共ェイ聞かぬとは不屆奴誰そ來い〳〵

侍女出つ

淨海　侍共をこれへ呼へ

侍女　侍衆は皆急いて小松樣へ參りまして私共はかり殘りましてござります

る

淨海　なに皆小松へ參つたとか

侍女　御意にござりまする

淨海　何故内府は呼取るにや――若しやこゝへ攻寄する――

貞能出つ

淨海　オヽ貞能何故あつて内府には侍共を呼寄するそ

貞能　余の義ではござりませぬ御院參ある由を仙洞聞こし召し及はれ官位と

いひ俸祿といひ先例に秀てたれは深く朝恩を存ずべきに却て國家を亂

さんとは輕からぬ朝敵あり速に追討せよと院宣を下されましたが父に

向て弓引く事いかにしてもあるべからすさりながら勅定もまた背き難

うござりますれは此事殿の聞こし召し若し御自害もやあらんかと某に

守護の命仰せ付けられましてござる

淨海　そりやまことか

貞能　何條虚言を申しませう

淨海　いや〳〵攻め寄するなら寄せ來れ余命少なき此淨海引受けて死するはかり其方歸てそう申せ

貞能　某い守護の命受けて參りましたれは別の御使お立て下され

淨海　守護なんどゝい不禮なり入らぬ入らぬ淨海一人門を開て待受け居るぞ

貞能　ヱ

淨海　立て立て立て早歸れ

貞能　ハァ——　入る

其七　重盛館

侍續々出つ

家貞　お召しに從ひ筑後守家貞

景家　飛彈守景家

兼康　妹尾太郎兼康

經遠　難波次郎經遠

一同　其外一同參上仕つてござりまする

重盛出つ

重盛　さて總數はいくはくあるや

盛國　洛中は申すに及はす

一侍　白河

二侍　大原

三侍　芹生の里

四侍　加茂

五侍　鞍馬

六侍　嵯峨

七侍　太秦

八侍　梅津

九侍　桂

十侍　淀

十一侍　岡の屋
十二侍　宇治
十三侍　醍醐
十四侍　日野
十五侍　小栗栖
盛國　我も我もとはせまゐり
十六侍　若年なれい眞先かけ
十七侍　老たりとて止まらす
十八侍　鎧着て甲なく
十九侍　弓持て矢持たす
廿一侍　馬に鞍置く間も遲しと
廿二侍　出家遁世の入道まて
盛國　かけつけましてござりますれは總數二万五千騎はかり着到致してござりまする

貞能　貞能出つ
重盛　立歸りましてござりまする
貞能　あなたの樣子は如何なるそ
重盛　入道殿の仰せも聞かす皆々これへ參りましたれい殘る者は靑女房祐筆はかりにござりまする
貞能　して父上い何といはれた
重盛　仰の如く申上けしに中々ひるみし御樣子なく攻め寄するから寄せ來れ門を開て待受けると以ての外の御景色
貞能　フム――いやおに者共これへ寄れ日頃の契約違へずして早速にはせ來りし事かへす〳〵も神妙なり重盛今朝天下の大事を聞出したる故呼寄せしが後開紛せいあやまりなりしされはけふは立歸れさりながらこれに馴れ此後またも呼寄す時決して遲滯してはならぬそ
家貞　我君の御仰せ
景家　何條違背致しませう

兼康　いつにても此の如く
經遠　參上致すで
一同　ござりまする
重盛　オヽ重盛過分に思ふぞよ
盛國　さらはこれにて
一同　下りまする
重盛　貞能
貞能　ハッ
重盛　今一度西八條へ
貞能　して御口上の趣は
重盛　院宣の義いよき樣に此方にて計らひまするれい先つ今日は心安く思召さ
　　れ候へとよく〳〵申傳へてくれ　　入る
貞能　かしこまりましてござりまする
重盛　恨みもせずに歸りたる侍共に引へかて飽くまて我慢の入道殿またいか

貞能の外皆入る

ようの惡行を企て玉ふも計られす不道の人も我父上何とて及を向けら
れん諫めても止まらす却てつのる暴逆のはては一門一家の滅亡救はん
としても救はれす一年つヽに落ちて行く其有樣が見られんや不忠不孝
の其上に子孫に不慈の此重盛かくても命ながらへて世と諸共に浮き沈
み但し世を捨て遁れんか身は遁れても此心忘るヽ暇あるへきかァ是非
善惡に迷ふたわい——祈るい熊野大權現何とそ我父入道の我慢の心和
らけて君万民を安んし玉へ——とても此事かなはすは先つ此重盛の命
縮め玉へ偏に願ひ奉る

麻子出つ

麻子　ヤァ我つまの後から赤い光が立ちました
重盛　ァ是非もおき運命じやなあ

第五段

其一　夢の高殿

さなきだに限りある身を我と我命縮めて長き夜の眠り待つ身に夢惜しむ枕も今い無益やと捨てゝ居明す曉の空つく〳〵と眺むれは西か東かいつしかにうつゝともおく迷ひ行くおとましの我身やな

重盛出つ

重盛　こゝはいづくの國なるか

見渡せい遠近の山は霞に浮かされて幾重たなひく横雲の中に消え入る鳥の聲野にい菜の花蓮華草梅と櫻の中拔けて柳に移す花の香の使い輕き蝶の羽送る風さへそよ〳〵と吹きも亂さす立つ烟春かと見れはこおたにはあやめに並ふかきつばた中に入りたき姫百合の野末は遙か青々と波立つ上を白鷺の影僅かなる日の光染み入る蟬そ夏ならむこなたは秋か女郎花萩もこぼさぬ眞盛りは菊に耻ちてか赤らみし楓洩れ來る鹿の聲虫も弱るや冬の野のころもは雪の裾摸樣池の鴛鴦

美しと姑らく眺め入りにけり

重盛　あれ〳〵俄に高殿が

こがねの屋根にしろかねの柱障子は瑠理琥珀手すりは珊瑚きざはしの馬腦を踏て下り上る

重盛　あるじは誰そ何人そ

折から獨り上蔦の顏は小笠に隱せともうさは隱さぬ旅衣やつれはてたる姿にて歩みなやみて來りける

女出つ

重盛　これ少し物問はふこゝは誰の舘そや

云へは女はさめ〳〵と暫く泣て居たりしが稍あつて顏を上け

女　語るもつらきいにしへの

春暖かき我舘妹春の夢を引裂きてつまは鬼住む離れ嶋我は日かげもかすかなる深山の奥や風荒き浦回に逐はれ逐はるゝも指折り見れは幾とせやいつか再たひ鴛鴦の寄添ふ事もなさけなや戀しき人はわたつみの藻くづとなりて殘る身を尙

もさいなむかたきこそ

女　此館のあるじなれ　女入る

其名をいふも口惜しと横目に睨むて走り行く

またもこなたへ亂髪の翁と見れと年知れぬ命淺ましき骨にのみ殘る姿を衣さへ破れ引裂け色さめて此世のものと見えざるに此世の重荷尙負ふて杖にすがりてたどり來る

翁出つ

重盛　御身はこゝの領地のものか

問へは齒もなき口を玄め色ぉき眼見開きて

翁　領地の者とは恨めしや

領地の主と諸人に仰かれたるも五十年殘る命を月や花花より月よりいとし子に送らんものと讓りたる弓矢も太刀も打落し撫てつさすりついつくしむ手を斬り首もむごたらしう

翁　刎ねたるはこのあるじ

せめて一打うちたやと杖上けかけてよろ〳〵〳〵陰打ちさへもかなはぬかとなまなか殘る血の涙拂てあなたへ過て行く　翁入る

つゞいて來るは草刈童背よりも高き籠負ふて歩み苦しき其風情

童二人出つ

重盛　これ〳〵童餘り荷か勝つような少しつゝにしたがよい

一童　此人が何を云はんすこれだけ運むで行てさへ

二童　けふの暮しがむつかしい

重盛　ませた事をいふやつじやのう

一童　ませるにもませぬにも物を食はねは活きて居られぬ

重盛　それは父母があろうがな

二童　父は一日野働き

一童　母は夜も機織て

二童　それでも中々過せぬわいな

重盛　そりやまたなぜじや

一童　取立てが酷い故
重盛　あんと
春は來れとも花も見す夏は照る日に燒き焦され秋の野分をよう〳〵とのがれて
冬を凌かんと納めるは上の藏其身も馬と使はれて
二童　ほんに水も飲まれぬわいな
重盛　去てまた誰の領分じや
一童　誰とて外にあろうか
二童　日本中を分け取りして
一童　自分はこんな家に住む
二人　平家じや平家じやじやわいなあ　（消ゆ）
忽ち天地闇となり時々裂けて稻妻のあかき方より鳴る音は雷かと聞けは雷なら
す飛ひ來る風に落る雨風雨に乘て牛鬼馬鬼猛火燃へ立つ火の車此方目かけて引
き來る
鬼出つ

一鬼　時節來れり運命盡きたり
二鬼　入道いつくそ疾く〳〵出てよ
三鬼　一族殘らす出てよ出てよ
四鬼　まつ此館打碎け
五鬼　障子蹴破れ柱折れ
六鬼　天井碎き屋根微塵
七鬼　幾百人の涙の種
八鬼　幾千人の怒の的
九鬼　幾万人の恨の根元
一鬼　いしずえ餘さす吹散せ
二鬼　五十年の事業の塊
三鬼　唯一時に打碎き
四鬼　彼等の我慢をあざ笑へ
五鬼　彼等の罪惡數えよや

六鬼　彼等は人の汗絞れり
七鬼　彼等の汗を絞るへし
八鬼　彼等は人の皮剝きたり
九鬼　彼等の皮を剝けや剝け
一鬼　彼等は人の血を吸へり
二鬼　彼等の血汐を吸へや吸へ
三鬼　彼等は人を沈めたり
四鬼　彼等に水を食はせよ
五鬼　彼等は人を焼き焦せり
六鬼　彼等を烈火に投こめよ
七鬼　彼等か枯せし骨はいくはく
八鬼　彼等の骨にて森作れ
九鬼　彼等か刎ねたる首はいくはく
一鬼　彼等の首にて山築け

二鬼　いざ〳〵出てよ出ですんは
三鬼　片つ端から引づり出し
四鬼　此火の車にて連行かん
五鬼　先つ入道より引づり出せ
さしも巧を盡したる高殿塵となる中より父入道を引出し炎渦巻く其中へ投込め
いくれおゐの光と共に鬼も消え跡にい白きしやれかうべ數限りなく積み重り山
なすい唯々と寄らんとすれいふしまろび共に埋る其跡に笹綸藤の旗高く揭けて
源家現いれたり

頼朝侍大勢出つ

頼朝　二十年の其間堪へ忍ひたる甲斐あつて今日唯今入道の首級手に入るう
れしさよ平家殘らす討亡ほしこれより源家の天下なり者共かちどき

一同凱歌

頼朝　入道の首木にかけよ
一侍　ハア(梟首す)

頼朝　はてこゝちよき有様じやなあ
喜ふ聲に悲しみて見れば夢とぞなりにける

其二　燈籠堂

重盛夢醒む　貞能侍坐

貞能　我君
重盛　貞能か
貞能　ひどう御苦痛にござりまするか
重盛　そちや何も見さりしか
貞能　それはまたいかやうなる
重盛　地獄の鬼の火の車
貞能　ヱ
重盛　一家一門髑髏の山
貞能　それはお夢でござりまする

重盛　夢――いや夢でない未來の實相
貞能　さてそれはいかなる有様
重盛　いや語ても最早無益――併しかの頼朝は近頃何如なし居るそ
貞能　彼は矢張北條四郎時政方に居りまする
重盛　北條は平家の端されと先頃は源氏に附きたり
貞能　承はれは彼の娘私かに嫁せしと申す事
重盛　フム――東國は源氏の根本枯れても殘る草原へ放ちたる虎は再たひ捕ふる事はなり難し――思ひまはせはいとゝ尚心細き一門の成行くはては今の夢
貞能　ヱ
重盛　ア背の苦痛は數でないわい

侍出つ

侍　唯今西八條よりお使者として主馬の判官盛國殿見えましてござりまする

貞能　我君いかゞはからひませう

重盛　これへ通せ

侍　ハッ

盛國出つ　入る

貞能　これは〳〵判官殿お使御苦勞に存しまする

重盛　盛國か近う參れ

盛國　ハッ

貞能　さてお使の趣は

盛國　さればでござる君には日に〳〵御いたはり重らせ玉ふと承はり大殿にも殊のう御配慮何とて今まて療養のはからひはおき事にや恰も此程唐の國より目出度醫師の渡り居れは追つてそれへ參らすべしまつ此由を傳へよと懇々仰でござりまする

貞能　此間より幾度かお願ひ申す醫療の義

盛國　拙者も何とそお聞きある樣

二人　お願ひ申し上げまする

重盛　志はうれしいが所存あつて聞かれぬわい

貞能　ヱイ

盛國　折角殿の仰せなれはせめてかの醫師にお目見得なりとお許しなされて下さりませ

重盛　いや〳〵我は大臣なり大臣の身にてありながら異國の客に見えん事我に醫術のなきに似たり國の耻家の耻たとへ命を失なふとも國家の耻に代へられす――さりなから其醫師に費を惜むと思はれんも快からぬ事なれば貞能金子五百斤取出して與ふへし

貞能　ハッ　入る

盛國　承はれは此上に申し樣なきおん仰せ

重盛　此由父に申上けよ先立ち行くはいたはしけれと例おき事にもあらす必すお嘆き下さるなとよく〳〵そちより傳へてくれ

盛國　ハァ　貞能出つ

貞能　すおはち金子五百斤彼醫師にお渡し下され

盛國　たしかにお取次き致すでござろう

文覺追かけて維盛資盛出つ

貞能　ヤヽ思ひがけなき若殿達

盛國　そりや何者でござりまする

維盛　案内もなく館にかけ入る

資盛　法師姿の怪しき曲者

維盛　捕へんとしても手强くして

資盛　思はすこゝまで參りました

文覺　いやわしは怪しい者ではないこゝの内に死ぬ人があると聞た故引導し

てやろうとわざ〳〵やつて來たのじやわい

貞能　いやこいつ忌はしい事をいひをるわい

盛國　見れはむさくろしい風をしてこゝをいつくと思ひをる大方汝氣違じや

な

文覺　そうじやわしは氣違じや

維盛　いや氣違のまねをして

資盛　入りこむ間者であろうがな

文覺　そうじやわしは間者じや

貞能　間者とあれは免されぬ

盛國　去ていつくよりの間者なるそ

文覺　地獄からの間者じやわい

盛國　何をいふやら矢張氣違ひ

貞能　不禮者めが下れ下れ

文覺　いゝや下らぬ下つたら死人か成佛出來ぬぞよ

貞能　憎つくき賣僧め

盛國　若殿拙者等にお任せあれ

二人かゝる　爭ふ　文覺遂に捕はる

文覺　ヤィ〳〵これは法師に繩かけたな

貞能　オヽ縄はかりか首も刎ねるそ
文覺　首を刎ねたらとむらひが出來まいが
盛國　おのれの樣な氣違坊主何の役に立つものか
文覺　おれの樣な氣違坊主じや故引導をしてやるのじや
貞能　ヱイ何をいふやらたはいもない奴
文覺　汝等には分らぬわ死人はどこじや早う見せい
盛國　まだ申すか
文覺　見に來たのじや故見せいといふのじや
貞能　ヱイ面倒ないつそ一打(刀を拔きかける)
重盛　法師これへ
皆　ヱイ
重盛　重盛お目にかゝるでござろう
貞能　我君にはかゝる狂人
重盛　其方共は控へて居れ

盛國　それじやと申して
重盛　早うましめお解き申せ
貞能　ハア　縄を解く
文覺　上坐に就て案の上まだ成佛せぬな
重盛　去ていかにして引導めさる
文覺　そうじや其胸先を一刀にぐつと突くのじや
貞能　こいついよ〳〵怪しき曲者
盛國　矢張間者でござりませう
重盛　まて〳〵たとへ間者にもせよ刺客にもせよ表門より白晝に這入つて來れは此方も縄をもかけす太刀取らす逢てやらねはならぬわい
文覺　成程こなたは大將じやな
重盛　貴僧はまた法師にして何故塵を起さるゝ
文覺　ヱ――いや引導渡すは法師の役じや
重盛　併し變つた渡し方

文覺　何の變つた事かあろ千万卷の經文を續盡しても成佛出來ぬ因果おこなたの病でおいか

重盛　すりや我病を承知おるか

文覺　呑と胸の腫物は裂て破るか第一じや

重盛　併し貴僧の裂き樣は余り手荒うはござらぬか

文覺　それは腫物が大きい故

重盛　大なればまた難しゑて貴僧のお手際は

文覺　拙ない事を致そうか

重盛　然らはよろしくお賴み申す

文覺　あの拙僧にお賴みとな

重盛　いかにも

文覺　ウフ

重盛　ハヽ

文覺　ウフ

重盛　ハヽ

二人　ウウハヽヽヽヽヽ

重盛　いやこれも不思議の緣でござろう

文覺　良緣か

重盛　惡緣か

文覺　敵か

重盛　味方か

文覺　重盛殿

重盛　文覺御坊

文覺　なんと

重盛　いやなに知らぬ御僧

文覺　お別れ申す

重盛　合點の行かぬ御問答

文覺　ありや何者でござりまする

重盛　後に思合すであろう――いやおに兩人あれに居るは何者じや

貞能　ハッ

盛國　若殿達でござりまする

重盛　大罪ある二人の悴誰が許して立歸つた

維盛資盛　ハッ

重盛　免しを得へき功でも立てしか

維盛資盛　ハッ

重盛　功もなく許しもなく自儘に館に立歸るとは我を侮どる致し方――それへ出よ手討にする

貞能　ェイ

盛國　これは思ひもよりませぬ

貞能　日頃に似ぬ無慈悲の御諚

盛國　たとひお免しなきまでもお手討とは余りの事

貞能　まつ〳〵お止まり

二人　下さりませ

重盛　いや〳〵止めるな憎つくき悴免し置かれぬ覺悟せよ

二人　そこを何とぞ

二人止む　重盛拂て刀を取る　切り兼る

知盛　暫く〳〵父上よりの仰でござる暫くお止まり下さりませ

重盛　なに父上より　知盛出つ

知盛　先つ〳〵お止り下さりませ

重盛(刀を置き)さて父上の仰とは

知盛　されは維盛い當家の嫡男然るにかく重病の折柄に蟄居なしては掛念なり資盛も長の苦勞共々勘當赦免あれとの仰に我等一族も

貞能　我々臣下一同も

盛國　お願ひ申し上げまする

重盛　切るが慈悲か免すが慈悲か悟らねは恨むべしァ通れ難なき一族の

皆

重盛　ヱ　いかにも勘當免すであろう

維盛　すりや御免し

資盛　下さりますか

維盛　有り難う

資盛　存じまする

重盛　左程までに嬉しいか

二人　ハッ

重盛涙に咽ふ

維盛　こりや何となされました

重盛　いやどうもおい――時に維盛再たひ家に入るからは妻なくてはかなふまじ唯今妻を迎ようそ

維盛　ヱイ

真能　打て變つた此御機嫌兎に角お請けおされませ

維盛　それでもこなたに

重盛　いや余人でない故中御門成親卿の息女綾子の事

維盛　ヱイ

重盛　孤兒おれはいつまてもいたわつてやるがよい

維盛　ハア

知盛　丁度あなたに控へてござれは一寸これへ招きませう

真能　御臺樣にも久々にて御對面なされては

重盛　オヽ久しく誰にも逢はざりしが今は許す皆呼へ呼へ

真能　ハッ　入る

直に麻子綾子と出つ

麻子　我つまお久しうござりまする

重盛　そたなは堅固で目出たいのう

麻子　承はれは二人の子勘當お免しなされまして維盛は此綾子と添はしておやりなさるとやら有り難う存じまするそれ綾子これへ出てお目見得を

綾子　何と申してよい事やら唯々おうれしう存じまする

重盛　綾姫か幾久しう彼と苦樂を分け玉へ――それ皆の者に酒進めよ

貞能　ハッ(盃を出す)

重盛飲て維盛にさす　維盛受ける

重盛　維盛

維盛　ハッ

重盛　今云ふ事よく聞かれよ御身は人より家の嫡統遠からす世を繼き玉はん榮ゆるも衰ふるも先つ御身の上にかゝるべし必す君に誠を盡し人を憐れみしえたげすたとへ衰運に落行くとも決して非道をおし玉ふなさらぬたにかさおりし罪の報は重からんせめて誠の道を守りそれにて亡は丶後悔あらじ――貞能彼に引出物を

貞能　ハッ(袋に入れたる太刀を出す)

維盛　こりや當家に傳はる小烏丸でござりまするか(袋をはつして)ヤ忌はしい無蚊の太刀

重盛　いや貞能かあやまりおらす日頃は父入道殿如何にもおり玉ふ其時に此重盛が佩かんものと思ひ居りしが今却て重盛父に先立つ上は御身こそ佩くへきなれ祖父の時父の時此刀を用ひ玉へ

皆泣く

重盛　最後の日影も消え失せたり最後の歌を唱はせよ最後の唱名致すであろう

簾を下す　皆泣て入る

燈籠に火を点す

歌

こゝろの闇の深きをは
燈籠の火こそ照すなれ
彌陀の誓を頼む身は
照さぬ處はなかりけり

若き女六人つゝ銅鈸子を鳴して椽側を廻る

淨海宗盛知盛重衡麻子維盛綾子資盛
時忠貞能盛國家貞景家經遠兼康　出つ

淨海　重盛重盛
一同　内府樣

簾を上ける

淨海　重盛には
一同　早御最後

重盛中臺に坐して瞑目

重盛少し目を開て復たふさぐ

畢

高安三郎作

遠藤武者　近刊
公　曉　近刊
眞田幸村　近刊

明治二十九年九月十五日印刷
明治二十九年九月廿四日發行

定價金三拾錢

百三十二

版權所有

著作兼發行者　東京市本郷區眞砂町三十番地　高安三郎

印刷者　東京市神田區雉子町卅四番地　宮本敦

印刷所　同所　宮本印刷所